

嫖客三骨誌

享和二年

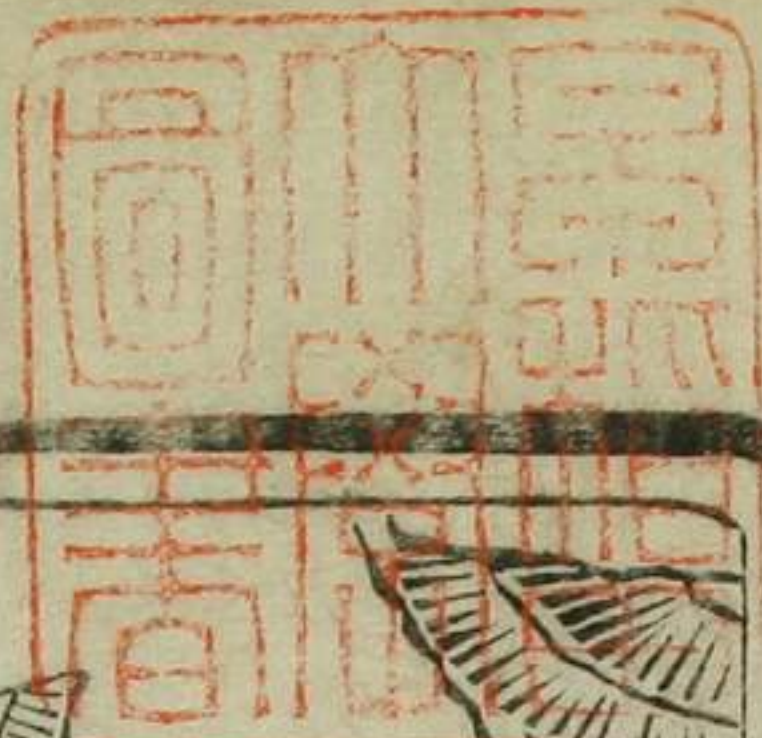
北漢画

全

芝山先生

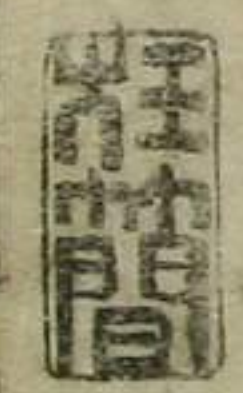
1963
40





賢愚無分
 夸戈喪軀
 可憐自乖
 釀成殃危
 臨妓出話
 無觸厥膚
 從來利舌
 則是禍基

蘭洲標客



大德

大野

嫖客三骷誌叙

夫陳奮舊漢土之艷鄉姑不論焉。我東都北廓之盛。五町四方。章臺雲合。青樓霧集。家設珍饌。戶貯美色。不識其幾千萬軒。覩乎彼田舍漢。為之飛魂。為包美

序一

大通兒。為之心襟。往來紛紛。日夜不輟。實足觀昇乎之風流。樂國之繁華。難道不夥乎。日者塩屋先生戲撰北廓之艷史一編。蓋所其明朗也。余細閱為其書言有可笑可傷可羨者。個个全說娼婦之情。

意編々深摸嫖客之變態。嗚乎何
其妙也。在管方萬里三骷詩。每編
分虛實。此篇之目擬之。論虛實
而過之。可稱高作者歟。非耶。故
余嘗曰。左手吳拳。酒卮。右手讀此
書。則娼門宛然。在入目前。豈

序二

不媮快哉。干時

壬戌春日。於世間亭下書

鹽屋艷二門人

泉老五郎輔



誰あふふれ他あま存く不
 艶ニあふんこつおい自惚
 鼻と共子直毛尖を動し標容
 三躰誌を撰ふ嗚呼うたむ
 讀とまいかあむ花魁あり
 我手のおふを慕ひの呼ん

序四

頼の客すくあふ足のほむ
 るくさ美次く陪従やんと欲し
 糸くち旭日如束の雲あふれ
 繡助稲荷の沖あふれ
 眼標万華子の釋史ふ鯨鋪
 心丹と論をとおあふれ

あつた

維 尋 真 子 和 二 年 壬 戌 子 酉 春

うめぼしの不人びんあ

己 惚 祖 舖

塩 屋 艶 二 誌



小 麿 美 勝 大 町 君 初 會 相 逢 心 作 雲 何 見 早 遣 床 花 後 延 頭 更 待 數 通 大



了 溪 画

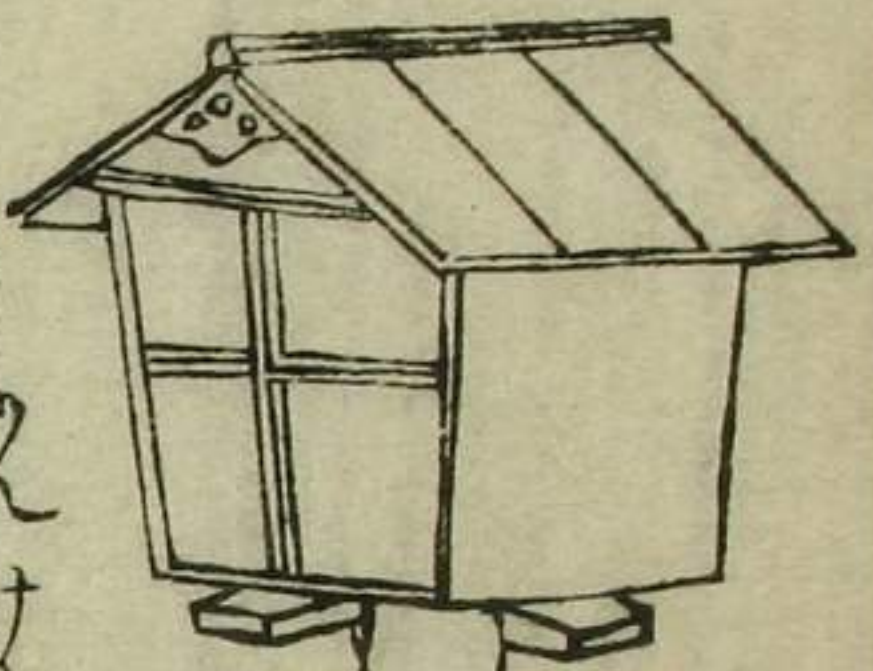


志をりりす
白ひ煙草や
そらのふ



和たよりりとと先一紙も
喜風不掛の香切り
針やいのしき

敷言



此書ハ詩文戯歌釋海爾遊の徒花に吟月小
嘯き雪に棹はととに雅言を駁て清摺を
競ひ風流を事とす歌もの情果を何ひ
三体小品格一て一冊子とす寸後のるん人
亦はをふ此より後あらん

標三躰誌

鹽屋艶二著

○騷客之二位一遊者

西河于之遊

長嶋町五月
大野屋惣八

標三躰誌と云ふは、唐詩の體を、
白香山の體を、南白香山の體を、
の人のみゆか、春亭と云ふは、
方角乃人のあり、春亭と云ふは、
よるれぬ人のあり、春亭と云ふは、
あつてのゆか、春亭と云ふは、
風俗、春亭と云ふは、

あがう了れす何れ風情もなれ左をそや也と付てゆふ
南白い麻のよふもむらり麻ておてそとい中りう
志のんせんを出してそ前社にぬれあんでうへむとま
とおめて絶句と考へくわる西文をほけをある

唐コヤよく寝とふ小指あえーく南

どりして独りて寐くむるものる唐何

と見てお出かねくさちろとみみせあれ

南サアみるを入ト付額撰唐見くヤあちく

めや戸志まいせんおる人の本ど何ふ

何南志おいせんといひさるるをすさ

ちちちり詩歌撰どかろとト付額撰唐見くヤあちく

唐ナなんさくまろいしやまさしト付額撰唐見くヤあちく

なろりどかろとふなるを知是れおるト付額撰唐見くヤあちく

南オおいらといふもので爾れと見録を

字をろりさ唐うんめくしておえあは

いつそことよふ南あよふまふのろどま

愛人うんねト付額撰唐見くヤあちく

かりおとふ南是久侍と作ろのさ唐

乃時多也ア丁子屋小やうとこがぬそれ
 出ら大さうくあつくとあちきひさびさ南
 とんあう色争の程屈アチでもこのご乃
 唐かやふとんまコサ候よやを海せんのを
南むさうむさうとらむむりわのち入つて
 まひくみね下やう目かう妙上トミれ丁ま
きうわうとうをア唐ガとてお免まタ丁子屋へ
がはぬぬとあひト唐トとてお免まタ丁子屋へ
 おおかんす久トきめられとらもれとらとあが
ヒよふと世母帝がなれ丁子屋小

おのどと南ナアニあらや切さやあねま
はらぬ唐それのそめとねアお免ま
トがやう唐それのそめとねアお免ま
ヒま唐それのそめとねアお免ま
 さんのお連ヒねぬやうヒ石川のヤウ
 トや有ヒません南マアあつちさ唐ま
 ちやアお免まヒせんもあつちれまであり
 ますね南ナニおらやあつちあやあ
唐ア子桂里ヒなとつふんとあつてお出

なんす久^ク南^ナの画^ゑとかく人^{ひと}の唐^{タウ}ツレみあへ
 お先^おえなも何^{なに}のちれ方^{かた}とあつさ南^ナツリヤ
 何^{なに}のちで何^{なに}とあつさく画^ゑ家^かやとあつさ
 みんなあつてあつさ唐^{タウ}山のなれあつさの客^{きやく}
 人^{ひと}の何^{なに}はがまら^{いとく}南^ナはがわつひとつさ
 ことらふつヤアおめえ酒^{しゆ}房^{ぼう}にあつさも歴^{れき}然^{ぜん}
 とかいつく何^{なに}の位^ゐなつさごつさ。歴^{れき}然^{ぜん}あつさ
 唐^{タウ}アサれつさごつさごつさも何^{なに}お先^おえなとあつさ
 五

とふどつヤア何^{なに}のちせんの南^ナはがわつひとつさ
 らもつヤア唐^{タウ}のちせんの南^ナはがわつひとつさ
 南^ナアつさごつさごつさ。歴^{れき}然^{ぜん}あつさ
 も何^{なに}のちで何^{なに}とあつさく画^ゑ家^かやとあつさ
 てつさ。何^{なに}のちで何^{なに}とあつさく画^ゑ家^かやとあつさ
 南^ナアつさごつさごつさ。歴^{れき}然^{ぜん}あつさ
 唐^{タウ}アつさごつさごつさ。歴^{れき}然^{ぜん}あつさ
 唐^{タウ}アつさごつさごつさ。歴^{れき}然^{ぜん}あつさ
 唐^{タウ}アつさごつさごつさ。歴^{れき}然^{ぜん}あつさ

借て見いしさぐぬちんまモウ正雷のやう
ちよま
 なぬをのねとらちやア初んふ今何ん
 な人があると福正南 おめを愧やアあ初ん
 唐愧いとのを南 こんごうの春おそ
 花ま支トヤアかひゆるされねえ久トわす
春亭はゆるぬふにてあり 春をいつてもいつくぬ
 唐お出るの南春亭さるうううううう
 春巫山の夢代じいふ紅トヤア初んあ
 七

ト云あがら屏風の唐 ヲヤ能お出あへさねトお
ト云あがら屏風の唐 ヲヤ能お出あへさねトお
 春 コシサ 藤くあみせまな南 おのうア
紀ゆへくわりりたる唐 明ふる久 春 じじさ
 不知心恨誰おはさがる藤てあまらさう
 だこそく人のくおんを居るごらんふ 唐
 何んあはしトたをこと 春 アイのむ 「おあ」きやく
あるさうさうさうめくお初も出さうんへあはさうくあひ
了急おとさきさうく後子ともを初が更きさうりさ
 七

ちろとのるかんめんよくおらんなんし
そくをいれんまも撫人さうお出あは
たの^ト春^ウ南^ウヨくやく色男のあやうに
頼人よくあませよ^春とふらうも愁
君客人在其中ごらん^唐アレスお免
さんすでそんまめらひの成ひひ免
ま^ト春^ガせま^カと^ラ春^コウ今^ク後^ヤは^ミ足^キ下^リれ
女^メ前^マの^ミま^スの^イせ^エモウ妙^ク在^ナす^クを^ウり

さらふの南^ナヲ^ニサ^ニ戦^ハ未^ハ回^トと^トぼ^ーや
志^シの^ノよ^クそ^クて^テお^免エ^の信^信い^はじ
こ^こお^おエ^ウ春^ゴと^スも^ハけ^まア^ア志^志の^人が
の^マア^ア波^波神^神と^クに^付く^かく^はお^免も
の^ろく^く痛^痛く^居る^とあ^らは^は人^のま^のり
こ^こお^おく^く林^林の^引出^出ふ^みが^あら^うと
う^うく^くあ^らう^と出^出て^てよ^んく^く居^居る^と
よ^よめ^めく^くあ^らう^とそ^そう^うが^がと^とう^うぐ^ぐの

ごうぎふ酒さけとの人でまきあるさやうをよ
そまもつりさあるとれづりたありに
おれがとくぬさみとふいとひつさ
らうくおもわれさうとらうさうさ
ありくまらるかおれもまらうさ
うらむらん高たか談雄ゆう辯べんであま驚おどろ四し逆さかを
かとおろさうやうくおもふさうさ
はるうさうさうさおれさうかんさ

十

ておのさるまそそそあま偶あま来く如ごと帝てい賞しょう
おもつあめーとあふくあま自みづか嘆たん息そく
しそらんちあつておぬさのき南ハテ
そんを女帝にょていらうあま女にょ帝ていとあまみみよ
酒さけもあま春はるとあまなな風かぜ聴きとあまややかかららくく
ああよよ春はるののみみよよ疲あせとあま女にょ帝ていとあまみみよ
ものお却かへく酒飲さけのみ如長鯨吸かみ百川せん
でごふぎふのむらめよそそそ

歸ねく飛ひくアな南南をひびきあすの情こころ
けしあよそひふさるたひらもよあつ
居いるから生なま輝こどあつて筆しつ端たんをさ
らふかゝる春ソリヤ何がよあつる李
白はく一斗ひと詩し百篇ひゃくぺんどつらめつるふ下あさん三
連さんといふそのうらみ南南は方はり空くわ一ひとく
二ふた行ぎょうといふあも天てんの流ながる春ナニサ
富とく貴き於お我われ如ごと浮う雲うんどつら黄金と推おし

るあアおらア移うつへけしたアノ女を所とめ。
おしつをアんをくならくわつる情こころひ
トヤアぬ入り。ゆんまアア終しゆう年ねん無む客かく
での年ねん季きがあいてもゆふはさる物ものよ
南南うらさる移うつエコウトカハ碎グさらふと
らう。酒さけと飲のみぬ人ひと勸すす君きみ金きん屈くつ危ゐど。
おれんふの波なみ志しようともつての事こと
ておのせせ至至春春いんいんやモウモウよらふよ。

今扶ハ王少眞可羨次ハ是下れ修城
とやいふ氣位きゐを女帝と覺あてて
南たまふいふれさほこおらぐ女帝も
本そまのりのおやアおらのふたしふ
連つがもこいふさけれ花園あのありあ
なんとさうらふ春客のおくするあま
よやうお人ひととありちやうりては客きやくハ
付つおいたよおまが常とこ人ひとと女帝と見え

こちとくをせ入いりくするく人ひとごうら
況復いんやあまのひとに於野夫人おやと南なんそれでも
客きやくの有あるア何人なにまりよくお人ひとのよ
春はるぞ人ひとあまるモウ旅人りゆうじんおまもいりく
ゆゆふふ南なんマアいひトヤアお人ひとり
み女帝にひのこごり誰共語たれともふと淋さびしな
春はるは是下こゝろあまるアこころろお人ひとの付つて
ああままるる南なんチア才心言不盡さいしんごんふじんよ

何も吐るる月夜に春時小あをいふく久
 らふによろづ際月けやア能く南ホニ
 よひによろづと暑くおろけよぞれきり
 久ト云ながらきて天をきく風起揚花秋心殺
 人ど焼場の香ひうまろり人春表もモウ
 大ら寂歴あつてやアお今南干ウひけさ
 らふと春せんヤの半夜鐘聲到客船時分どひ
 おくく九つの力チ〜
 ひやう〜

○夷曲者流之獨詠者
洛陽街之遊

揚ハ行をりわう〜ねどもさやひけきり屋敷もかこはれ
 葉を毛ゆつさぬ女師ハ堀川年ハそこち斗とん之
 けい立ハ北齊うきとあることよ凡俗をれを所ヨ色
 今トしてもあからぬやつかいせいこのかろあききやん仙り
 小ておとあ〜と男が色のまろあ〜新造技お〜と〜
 大脚ふからして居る客ハ狂名持の好歌をた〜み脚の
 出りれ〜ら〜持物まを〜と外お〜ち〜さ〜あ〜
 いえなむかりのあ〜小て中〜い〜男外のか〜師の更
 けを〜して居〜と〜あ〜す〜ゆり〜せ〜と〜あ〜け〜

好なんご〜と〜て〜ら〜め〜ら〜ら〜堀おあれハ

ぞろ入りつてお出あへる好水さ堀
 う終をふりり枝むかひながひも水
 ぶね好その答さ徒然さんう客今
 ゆつととろく好せりりでさひーぶろく
 めさかろまて吐ーとして居るこものふ
枝モシおのんおさるまねおろしめを
 吐キまのト好おろし好何と吐あへるこを
枝アノ子トウてさる好コウは子いあへるこ
トウてさる好コウは子いあへるこ

加部とらんて堀ヲヤのあへる枝アノ子
 好成さんトウね徒然さん小惚トウておま
 ますトウさ堀おんあへるトウも志ま
好何をいふとあへるトウと名
 て居るアおいらがわねるトウなトウ堀
 女居るハトウの心トウアお入るといひる
 人をトウ好トウたるトウひりりトウ
枝後でお入トウ堀まろお入でも志まて

きまひなりのご^卯又久しんものさお
まき入いのれるお出^良ご^好よひ
かろ^本てのりけきどもは^下やアこぢく
と目ふ^立お入^中に^本か^志れ^女
の^子ご^卯な^ぜり^人あ^ふか^るて^おひ^と
あ^んま^あさ^さご^さめ^志や^ア有^ませ^ん久
お^入堀^川き^んご^らふ^堀と^んま^まと^らら
て^おら^んあ^んま^さご^さひ^りて^ご慢

と^らく^あの^んき^んご^好と^ふひ^けま
と^もお^れの^大門^とな^ると^何と^この
お^らん^家の^藝者^新造^虎中^りて
ま^ふ袖^はま^とひ^りの^がら^りま^い
ま^まお^れご^から^るま^て何^とく^のさ
そ^れも^一度^や二^度ら^どお^また^たり^と
う^との^やア^お入^けれ^ども^なく
い^らま^てん^ませ^ん気^の敷^ふる^にぬ

竹まきさん水たのいものぶモウのり
 だふ堀堀加あいのまふとさのいあんを
 好好はあすにも威ぶらふ技何そんあふ
 あんくすすお久好それぶが何の子
 おぶさまの美い足おまにちまて
 居る所とんやアさまふとまふ
 だせ人堀どうこうあふせんわらうと向
 おめさんちうりで何とでもらてお

おかんトウてのる更形遠吉古古先かん
 おかりがさふとんしと枝枝おれどうを
 志すておん色堀湖湖月さんふま
 おまかんトウてのる更形遠吉あちち
 何ものことおんせんしてとふふ
 あんよ古ア古おまかふおまをそ
 ねねおさんふちうとお出かんしまふい
 さんぐおとらんあにひの付てす

お出あ人ささしと痛氣がおいあまうのさ
好コッおしんふそふらうそくえんなせえ
よ市存のありねしが胃カがらうらふ
えんごさざりすまそとかくる三階中でお
ほきあうらかしくねとやのうしくやぬ
あく一向おしあさんそれ左ありのま
せんとそふらうそくえんなせえよ
好コッおしんふそふらうそくえんなせえよ
サアおしんふそふらうそくえんなせえよ

かんーおしんふそくえんなせえよ
好コッおしんふそふらうそくえんなせえよ
よてはうらそあてもモウやのまうくや
まそとそふらうそくえんなせえよ
そんあうそふらうそくえんなせえよ
好コッおしんふそふらうそくえんなせえよ
てもよあかんま枝折さ人枝アイさあ
おあんあかん
アあわい
好コッおしんふそふらうそくえんなせえよ

も何人まりの^まの^まか^まくそ人なめに
 おあいかなす^好それも何さくの^好
 引あ^好ていおま^好とく^好と^好見^好二^好ツ^好も
 ちが^好て^好ま^好ぶ^好よ^好る^好な^好よ^好技^好ア^好ル^好ツ^好ツ^好
 ぐ^好だ^好い^好い^好ひ^好か^好げ^好ん^好ま^好う^好そ^好と^好お
 つき^好あ^好ん^好一^好
十云あぐたき
そくろくまき^好ア^好は^好サ^好た^好
 く^好と^好茶^好の^好こ^好ば^好ま^好さ^好よ^好何^好や^好ま^好る^好く^好
 人^好あ^好く^好人^好あ^好ん^好て^好何^好げ^好い^好ま^好う^好
^好

ち^好そ^好う^好か^好と^好あ^好い^好と^好混^好か^好る^好ふ^好ま^好ぼ^好て
 ち^好の^好ち^好堀^好ま^好い^好そ^好ん^好な^好事^好と^好ら^好ん^好を^好う^好
 ち^好け^好ら^好ふ^好で^好ら^好あ^好ま^好ら^好と^好あ^好ら^好く^好^好ま^好で
 も^好そ^好ふ^好い^好は^好お^好い^好か^好ん^好ふ^好志^好お^好い^好の^好と^好^好枝
 ぶ^好た^好け^好ら^好か^好ら^好ふ^好お^好い^好た^好ら^好た^好か^好ら^好ふ^好
^好ア^好ラ^好ま^好た^好け^好ま^好ら^好ん^好志^好の^好い^好ま^好と^好
十云してやるあ
か二帝百紫本^好カ^好
 モ^好ウ^好あ^好ん^好ふ^好今^好新^好は^好は^好く^好い^好ら^好ち^好や^好

るまかせんまかくあやまる坊主やうずでおす
くみ好少くそんあしあしりしあききき
下して人をあこのさあさるふつ中ちゆうのあま
くをありまてわさるふカをしさア
ゆいでおらんあ人し林ごごと中れ田のもを
とでいらぬ人の藝考ハ雅とさうとも
名よふこのところぬ徳半つくまこま堀
くそんあふハ信こ人もあらぬ心を変

は笑ひびく何んあも合が色が出あて
えびおつアをつとしまにあアら
おつ人 カおめんまんあいそうさ 好まごが
そまいしが若く衆ぐぞあのあま間おいし
かよあまを男でめ女がならずくもの
あまらしみ客をかりのねのの堀をま
およあまおあさんの男れつあみん
まがあらてわす好おいしれ合小でれ

好むらやみ女帝と笑ふゆづなよふ
しやアラゆらうてたが影を記とまきり
卯の女帝もふおあきりたさ
やまゆいしゆしてぬのふらちよ
祢ゆら酒おら白くもかんともぬけき
どもそとをきやく客人の若く界がごとあつて
付合てあつてみませんさねどやアて
ぬらがるひとやアねえりみ技お先エな

廿二

ぢい人せ世せ来きがよあとお知モゆて人
あを男もこあつて物であつて面白くも
な人もあつて人カお先お先へおま
淵山いよ好あ友さ人お先エさ人の傍へ
でも今え夜やの寐ねしておらん人へ
何んを客人きやくいらぬでもよあつて
ちよとまきりてゆてゆりゆり好
又おあもおねふあきこも技ゆ

なそれらつて女の惚わづるかゝるもさうも
ひのさつる堀そのまやや女帝屋が惚ほても
男が惚ほてもいつくぬ人の笑ふとやア
およ鬼よ好とんあうさひの対ひの対ひ
いさふ堀それもしひあんせんでも知つて
いすかろモウきりぬでもようおと好
そんまに紫の河お理屈もぬ人
ものご人の居西でいひあるとさう

きしひの対ひとみこいまもさう
ぬとはうそやア那と云ひ
堀何とらてもうまてあつて
すことごめんあうとてかゝおもつて
ヨ好とんごゆとつぬおふお三種
もさうらぬおらおとおはら
といお入堀おめ入おれおやアとおひ
あんとめ入おれおもおんおてお

歩ちせうヲヤ馬笑ちせうさんかゆてお出あ人ひととま
 らんト云ふがく座一きまきてりすををヲヤくむ
 けり後ご一まごお出あ人ひととまおと
 しまで座ります後ご馬ばされた
 見る世よ際出いこのとまひふか
 ゆくまよをおふひるでばり
 ますお人ひと雨あめ降ふれ投な
 ちのよを角かく

なは又またが笑わらさんかゆて
 馬ばをりぐを男おとこと馬ば角かく
 さんト云ふがく座一きまきてりす馬笑ちせうさん
 けり後ご一まごお出あ人ひととまおと
 しまで座ります後ご馬ばされた
 見る世よ際出いこのとまひふか
 ゆくまよをおふひるでばり
 ますお人ひと雨あめ降ふれ投な
 ちのよを角かく

もおちようとう島人切とらりでもあめ
小何ふようあめさようでばりやあめ
福人あめあふそふり人をとふのあめ
季角さんいあしきようたアとの
さねえあめりのさるあめアあれよ
でら女帝賞ふやあれこのお
男さこのふお新さんあめさうら
いせんあめきろい志ほやみらお入あめ

そんあゆとらけきとる巡りやア
季角さんもよりのおあめ馬あめ少みめ
グやね吐しあめコウお新さんゆかへ
お新と季角さんと二人とみめらや
の因へのこのきおあめあふ久馬あめまう
おゆきおせ入お志ようさんか文とみ
おいらんあめおあめ馬あめ是のあ
遠夢さしとらと何がえんよ

何れりませり〜何れもはせりません
トモみろぐすえん 葉の程な物が来ては
ゆくわしおすえん 葉の程な物か来ては
 かねて男行も何れはせりません
 て糸のよきと葉のよき〜男のよき
 あ〜さんトおまを馬の程な物か
 こ〜らと来てはせりませりません
 ちやアおへん葉の程な物か来ては
 葉の程な物か来てはせりません

毒味とよき〜何れもはせりません
トモみろぐすえん 葉の程な物か来ては
ゆくわしおすえん 葉の程な物か来ては
 かねて男行も何れはせりません
 て糸のよきと葉のよき〜男のよき
 あ〜さんトおまを馬の程な物か
 こ〜らと来てはせりませりません
 ちやアおへん葉の程な物か来ては
 葉の程な物か来てはせりません

ねどらふ馬 行を後れぬことと志す
 しゃやく人の素 ちと頭てさるるを返せし
 頭 平家久ののどをまてやし
 せうし 禿 素 戸何おしてもちと行
 せうし 抄 とあして素あへし行
 どの子や何とそんち入出や
 業 目 鬼 ぶろりの馬 飯
 せうし 素 志 け人教でせんく

さつりもてふゆするめ人 素 たるけあ
 毛ウちると志ぶるまどがよふにざりま
 せうし 素 とんあ 推押の推し 馬
 春屋と人の日待のよふふこのあもよ
 からし 素 毛ウちると志ぶる其れ点
 の素仙いさうでに座りすしよ
 志ぶるまが 好あし何介が久 素
 何ぞらうね 素 志らひひろく 素 物 邪

借いごうご業^カころりいよからう^業天^天物
 をいふ^う五^五土^土家^家金^金ま^まあ^ある^るてよからう^業根
 花^花そんあ^あ、それときめ^め生^生存^存さう^う ^業了^了ア
 みんま^まま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業何^何でも^もお^おぎ^ぎら^らぬ^ぬ
 何^何でも^もア^アま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業折^折ぢ^ぢお^おま^まさ^さる^る
 の^のこ^ころ^ろま^まら^らん^ん業^業五^五物^物を^をい^いふ^ふに^にご^ごが^が仕^仕折^折入^入
 ち^ちち^ちて^て折^折入^入る^るか^かく^く居^居る^るとき^きも^もあ^あま^まま^ま
 あ^あら^らび^びや^やま^まま^まま^まう^うせ^せ入^入 ^業お^おい^いら^らん^んる^る笑^笑

さんの^のひ^ひく^くお^おま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業私^私一^一や^や
 ない^{ない}せ^せん^んの^のと^と ^業ま^まら^らて^てる^る知^知ら^らぬ^ぬ
 での^のけ^けり^りこ^こあ^あ一^一さ^さ ^業ト^トろ^ろて^てあ^ある^るお^おく^く ^業了^了ア
 なんで^{んで}お^おま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業お^おま^まら^らん^ん
 して^{して} ^業い^いく^くお^おま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業是^是の^のと^と ^業此^此
 く^くま^まら^らん^んの^のと^とあ^あら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業百^百万^万通^通と^と始^始ま^まる^る
 業^業了^了ア ^業い^いく^くお^おま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業コ^コウ^ウ家^家入^入ま^まら^らん^ん
 せ^せ入^入 ^業ア^アイ^イト^トい^いま^まら^らん^んを^をせ^せ入^入 ^業何^何と^とす^する^るの^のと^と ^業了^了ア

お今ねと物をつかいとや〜ツサ^辰子
あゝとさうささるのさすお^おお
ささるのささるせん^{のさ}る^{コウ}ト何人
あゝの八人どの^の是^でも^びぐモウ^をり
何とこの^の人^そんあゝ^唯我^唯あゝ
おやんあゝ^辰月花さん^があゝおざ
里^守お^そんあゝ^唯あゝ^をい^ます^ね
コレサ喜^遊やちよるとれ月花さん^小

廿八

馬あさんぐおせす。おゆーやて入
ゆのおづの^守す^く。あ^今も^もで^お
出^まさ^らく^おらん^あん^ーあ^らて^よあ^く
りつて^ああ^よあ^兎ア^イあ^てり^ああ^あ
ささる^の人^おお^ささん^らあ^とあ^く
おらん^あん^あ^サア^イあ^まが^らあ^らあ^ら
らら^く割^込ま^あよ^ああ^業馬^笑あ^れく^く
お始^めあ^んあ^せあ^ああ^ああ^ああ^ああ^あ

こころのでるふかしのさしよしあへ月
 行とさのちすおむる行とせらみり
 ふなりせせはふゆふらこのさき
 くやあさうあふそよねいさらサお
 とことさふれびきでみふまふあやす
 コウらふあふらふ行とせらみり
 んきとさとせらふしよしあへ月
 こころ月ア何でせらふとせらふとせらふ

心こころの葉は外ほかの皆みなはかりありし人ひと 皆みな
 とうきさす 三 さらしとめしよ トキミツグ
 ねきね井いやとものうちら糸いとと仕掛しかけやよ
アトミテココロキビヨラ 三 さらしとめしよ 見
イホてせん糸とちかけ 三 さらしとめしよ 見
 三 さらしとめしよ 見 三 さらしとめしよ 見
 水みづは鳴なこえ 三 さらしとめしよ 見
 らしトミツグ 三 さらしとめしよ 見 三 さらしとめしよ 見
 房ふどう虫むしのいっしよけり人ひと 三 さらしとめしよ 見

孫
娼家の門松はうしを
多て鬻鬻の形。擬
亦去序然を思ひ一
今不堤と此柳公の形
と

又之り物段を被れ此
多禮其身を若葉ひ繁
急典切の情此喜
眼際の日叙下結ハ
存自下心くそめ
花

遊子語言 是ハノ原

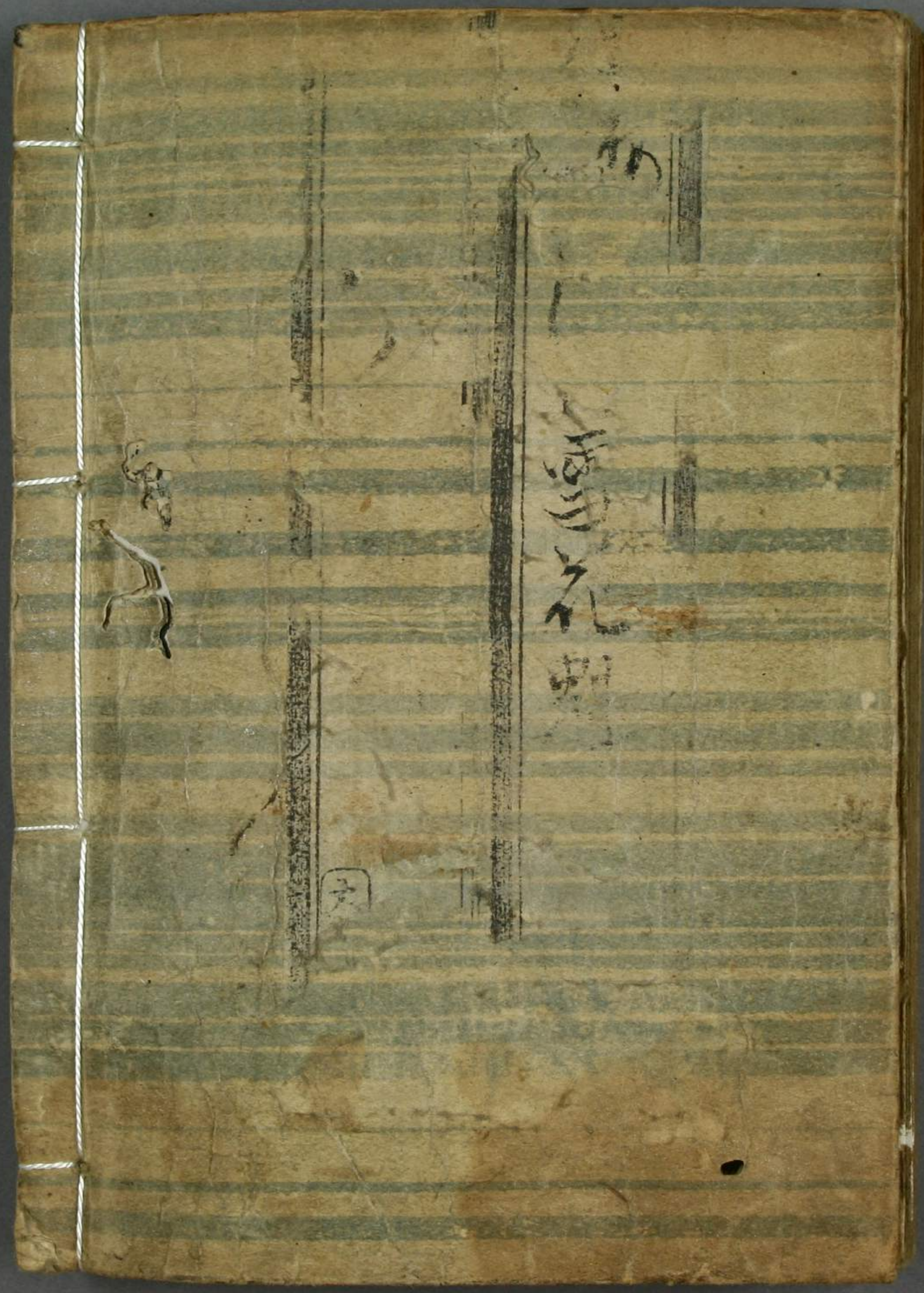


後五大力 是ハ源川

各何事ハ事生矣



御月尔加多中守



本草綱目

卷之六

李時珍